

「桜」というと、先ず「桜前線」の報道を聴いて桜を意識し始めます。その意識は「春」です。長い冬の終わりを実感し、心身の固さが解き放たれていく喜びが自然に湧いてきます。そして「さくら」と口ずさむとき、春の喜びが身を包みます。

私は四十五年ほど前、台湾は師範大学研究所に三年ばかり留学していました。時に日本が恋しくなると、「さくら」の歌が静かに口を突いて出てきました。完全に「日本」を憶い出す旋律です。日本の田園が浮かび、川岸の桜の下に居る自分を感覚します。その時、私のころは日本に帰っていました。以前テレビで、原発事故にあった福島の一、一時避難先から帰ることのできない地域の「桜」が満開になっていたのを見ました。人々の生活のないところで咲く桜はさびしい風景となっていました。一時避難している方の言葉が印象的でした。「あの桜のもとに必ず帰る」と。

莊川の桜は冬を堪えてきました。雪深い冬の間、莊川桜はお寺の法座、報恩講の声明を聞いて育ってきました。莊川桜の子孫が、このたび宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌を縁にご本山へ植樹される話が持ちあがり、今般、その念願がかなうこととなりました。莊川桜の先祖のように大樹となって、ご本山参詣の人々に仰ぎ見られ、称名念仏のひびきと共に願生浄土のころが悲引されることを念ずるばかりであります。



親鸞聖人のもとへ ― 「莊川桜」真宗本廟植樹

高山教区・高山別院 宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌推進委員会 委員長 小原正憲

高山教区・高山別院では、別院本堂の御修復を完遂し、真宗の念仏がこれからも相続されていく大きな節目として、二〇一九年五月、宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要を厳修いたします。

飛驒真宗の歴史を紐解くとき、親鸞聖人と高山別院（飛驒御坊照蓮寺）の開基である嘉念坊善俊上人との伊豆三島での出遇いが語られます。親鸞聖人のもとを發った嘉念坊善俊上人は、諸国行脚の最後に縁あつて飛驒に招かれ、白川郷鳩ヶ谷の地に道場を築かれます。飛驒に真宗の教えが根づき広まることとなる起点がここにあります。蓮如上人のころ、一時断絶の危機はあったものの、莊川中野の地に照蓮寺として再興され、さらに照蓮寺を中心道場として、飛驒各地に念仏の道場が開かれていきました。

この流れを持つ飛驒真宗の歴史に寄り添ってきた生き証人として、昭和三十年代に御母衣ダム建設のため、莊川中野の照蓮寺と光輪寺の境内地から現在地に移植された「莊川桜」があります。樹齢五〇〇年ともいわれる二本の「莊川桜」のかたわらには、嘉念坊善俊上人の像が建てられています。

このたび、高山教区・高山別院の宗祖御遠忌記念事業として、親鸞聖人そして嘉念坊善俊上人の精神を後世にわたりお伝えしていくことを願い、「莊川桜」の真宗本廟植樹式が執り行なわれることとなりました。莊川組、白川組をはじめ教区内からお声を上げていただき、また、宗派のご理解を賜り植樹式とまできましたこと、ここに衷心より御礼申し上げます。

私たち飛驒人にとりましては、嘉念坊善俊上人が親鸞聖人のもとへ来られたのだという心持で、このたびの植樹式に臨めばと思うことであります。そして、「莊川桜」の植樹を機縁として、飛驒と真宗本廟との間で、お念仏の心の通いあいがさらに深まっていますことを念じてやみません。

高山教区・高山別院 宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌記念

日時 二〇一七年十二月十一日(月) 午後一時半
会場 真宗本廟(東本願寺)

(東本願寺)

莊川桜 真宗本廟植樹式

開式のことば
真宗々歌
宗務総長挨拶
御遠忌委員長挨拶
鉦入れ式
感謝状授与
莊川桜植樹に寄せて
恩徳讃
閉式のことば

桜ものがたり

― 莊川桜秘話 ―

いまは、御母衣^{みぼろ}ダムの湖底深く沈んでいる
莊川村中野の照蓮寺と光輪寺の境内、かつて
はそこに生い茂^{さか}っていた巨桜^{こおう}二本が、湖畔^{ほとり}に
移植され毎年春爛漫^{らんまん}の花を咲かせ、白川郷の
古い歴史と飛騨真宗発祥の昔をしのばせて
くれる。この桜はいずれもアズマヒガンザク
ラで、樹齡^{じゅうれい}およそ五百年というから、その昔、
照蓮寺や光輪寺建立の際、苗木として植えら
れたものであろう。ともに高さ二十メー
ル、幹^{みき}の周り六メートルという巨桜である。
この莊川桜こそ、ダム水没住民にとっては唯
一の故郷の名残りであるばかりでなく、白川
郷住民にとっても、老桜^{おいさくら}の移植にまつわる秘
話は、ながく後世に語りつがれるべき美しい
桜ものがたりである。

昭和二十七年十月十八日、突然御母衣ダム
建設のことが政府から発表された。過去数百
年の間平和で静かなたたずまいをつづけて
きた白川郷民にとっては、未曾有^{みそ}の出来事であ
った。中野校下五集落が全部湖底に沈むと
あつては、地元民の驚きと嘆きは言語に絶し
た。死を決してまでもダム建設に反対せざる

高碕氏はさっそく東京に帰って、いくたり
かの大学の専門家を訪ね、移植のことを相談
してみたが、誰ひとり賛成してくれる人がな
く、かえってその無謀さを笑われたという。

氏は困惑して、数日の間、考えこんでいたが、
当時神戸市にお住まいの桜博士といわれた
笹部新太郎翁のことを思い出し、わざわざ神
戸に笹部氏を訪ね、その念願を打ちあけ、移
植に力を貸してほしいと熱心に頼みこんだ。
笹部氏はすでに齡七十を越した老大家で、一
生を桜の研究に打込んできた人である。高碕
氏の話を感じと聞いていたが、その桜に対
する愛情の深さに感動した。しかし、五百年
も経った老桜の移植などということは、世界
にもかつて例のないことだし、むしろそれが
可能としても、奇蹟^{きせき}に類することである。笹
部氏は老齡でもありとうていその任ではな
いと、いったんは断つてみたものの、高碕氏
の切々たる桜への愛情と、水没住民に対する
せめてもの心のつぐないにと、あれほどまで
に懇願^{こんがん}するその申入れを、これ以上むげに拒
みつづけることはどうしてもできなかった。

事業のためなら遺跡^{いせき}をこわし、名木を伐^き
ぐらいのことは、あたりまえのことと考えて
いる現代ではないか。御母衣ダム建設という

くる年の四月、人びとの見守るなかで、細枝
にやわらかい芽が出た。そしてポツッ、ポ
ツツと花をつけた。桜はまさに活着^{かっくわく}したので
ある。笹部氏の蘊蓄^{うんちく}を傾けての努力が芽吹い
たのである。それから日を追って桜は元気に
なり、年々すこしの衰えもみせず、現在では
かつて両寺の境内にあったときのように、毎
年美しい花が咲くようになった。

御母衣ダムの完成祝いに、水没住民が移転
先きから招待を受けて、いまは水没した故郷
を訪れたときのことである。一行のバスが湖
畔にそびえる莊川桜のあたりにさしかかる
と、ひとりの老婆が、突然大声で「おーい、タ
ノムワイ、タノムワイ」と叫んでよよと
泣きくずれたら、同乗のみんながいっしょに
泣いてしまったという。（元莊川村長・故柳場
松吉氏談）

「タノムワイ」と叫んだそのことばは、感
激のとっさの声で、ここ水没住民でなければ
出てこない叫びであった。インドの観光客の
一行が阿蘇山に登って、そのすさまじい噴火
口をみて感きわまり、誰いうとなく「アミ
ダー、アミダー」と叫んだというが、それにも
似ている叫び声は、先祖代々ながく培^{つちか}われて

を得なかった。故郷を憶^{おも}う純情と死活にかか
わるこの反対運動は、長年にわたって幾多^{いくた}の
曲折^{きよくせつ}があったが、昭和三十四年の秋、電源開
発会社との間に妥協^{だきよう}が成立し、反対期成同盟
死守会が解散されることになり、その解散式
当日、現地を訪れた同会社の初代総裁だった
高碕達之助氏は、式が終ったあと、やがて湖
底に沈む集落を回って、深い愛情に胸をいた
めながらふと中野の光輪寺に立ち寄った。そ
の時、高碕氏の目にとまったのが境内の老桜
であった。高碕氏は通産大臣も務めたことが
あり、人格高潔^{こうけつ}の名をもって知られた人であ
った。また自然をこよなく愛し、特に植物
に深い愛情と興味をもたれていて、自宅には
植物研究室があったという。その高碕氏がま
さに水没しようとするこの巨桜をながめ、い
かにも愛惜に耐えない面持ちであつたとは、
当時氏に同行していた若山芳枝さんの述懐^{じゆわい}
である。宿舎へ帰ってから、なんとしてでも、
あの桜のいのちを助けねばならんと、彼女に
その決意をもらされたという。これこそ、高
碕氏の愛情に生きた桜として村びとに語り
つがれる莊川桜にほかならない。

大事業を遂行^{すいぎやう}する電発会社の総裁、しかもい
まは既にその職を退いている高碕達之助氏
である。その人が私財を投げうって、この老
桜のいのちを救いたいというのである。笹部
氏は奇蹟ともみえるこの難事業に、わが命を
かける決心をし、老軀^{らうこ}をひっさげて現地に赴
いたのである。このことが電発側の耳に入
り、両寺の桜の移植に協力することになった
のである。

移植は、五百人の人夫を動員してはじまっ
た。また笹部氏の懇請^{こんでい}に動かされた当時日本
一という庭師丹羽政光氏が、選りぬきの植木
職十人を引き連れて現地に乗りこんだ。

電発会社は十五トンのクレーン車二台、三
十トンのブルドーザー二台、四十トン車一台
を提供してくれた。

樹幹や枝を藁縄^{わらなわ}でていねいに巻き、五メー
トルも張っている根を伐って、直径五メー
トルの根回りは完全に巻かれた。重さ四十トン
という巨大な桜を鉄橇^{てつぞり}にのせて、運搬のため
新たに造った路を、コロを使ってブルが少し
ずつ引きずって、山の中腹、現在の展望台の
ある地点まで約二百メートルを曳^ひきあげた
のである。

植林史上、かつてない大がかりな移植で
あつた。世の植物学者がいっせいにその無謀
さを笑ったのも無理のないことであつた。あ

きた手次寺照蓮寺や光輪寺の教化のあらわ
れかもしれない。

水上勉氏の『桜守』の中に、二本の桜が新し
い枝を張って芽ぶいた若葉のあいまから、う
す桃色の美しい花をのぞかせて、春風にゆれ
ているとき、この桜の根元で弁当をひらいて
いる一組の老夫婦が、日の暮れるまで、じ
いっとそこにいて、陽がかげりはじめると、
桜の根に手をあてて泣いている情景が書か
れているが、さもありうと推察できる。それ
ほどまでに断ちがたい故郷への愛着と、親
子、孫―幾世代この桜の下をくぐって寺詣^{てら}り
をしてきたことか。その想い出は、両寺の門
徒でなくてはわからないにしても、日本人の
心のふるさとをいつまでも語りつづけてい
るようである。

湖畔には高碕達之助氏の莊川桜歌碑が建
てられている。

ふるさとは水底となりつ移し来し

この老桜咲けとこしえに
― 高碕達之助翁作 ―

『莊川村史(上)』参照



水没記念碑除幕式



移植作業



移植作業中の照蓮寺桜



水没前の中野の様子



移植前の光輪寺桜と(左)と照蓮寺桜(右)